視点

# 配所の月

小森啓助

西鶴の『好色一代男』巻二の七「裏屋も住み所」の冒頭に、

配所の月、久離きられずして二人みるものかはと、うつくしき女の書きつるも、この身になりて、それはさうよと思はるる。

という一節がある。世之介は二十歳、前年から、不行跡のゆえに勘当されていた。この文章は、『徒然草』第五段の、

顕基中納言のいひけん、配所の月、罪なくてみんこと、さも覚えぬべし。

をもじったものであること、諸注に指摘されるとおりである。ただし、「二人みるものかは」の「かは」に関しては、多少の異説があり、『日本古典文学大系』の注には、「「がな」の意で用いたか」となっている。反語を願望に解するのは少し強引すぎると思うが、あえてこういう注が施されているところをみると、『大系』の校注者は、反語では読みが下らないと判断されたにちがいない。果してどちらが正しいのであろうか。

私は、勘当された覚えもないし、流人の経験など無論あるはずがない。けれども、兵隊にとられて、「配所」の生活を味わったことがある。一回目は、高雄を主とする台湾で二年二ヵ月ほど、二回目は、京城を主とする朝鮮と南方とで三年一ヵ月ほど。二回とも、召集されていきなり現地の配備に就いたので、あの悪名高い内務班の空気は知らずにすんでいる。兵科は高射砲であった。高射砲というのは、そもそも敵地に進攻してゆくものではなく、防禦一方の兵器である。相手の飛行機は、こちらからすれば、単なる「物体」であって、それに「人間」が乗っているという実感は、あまりないものだ。あれやこれやで、個人的には、むやみに軍隊を憎悪する気持は残っていない。人を殺しに行ってきたという罪悪感も、さほど大きくはない。戦犯者めと叱られるかもしれないが、それはこの際どうだっていい。自慢たらしくこんなことを書くつもりではなかった。『徒然草』の「配所の月」が成立するかしないかが、当面の課題である。

南方では、ソロモンのコロンバンガラという小さな島にやらされた。ガダルカナルからあまり遠くないこの島で、月の満ち欠けが、日々の生活の重大な関心事であった。観賞の対象では

ない。米軍の反攻が激化していたなかで、駆逐艦が食糧や弾薬を運んでくれる、一ヵ月のうち数日の闇夜が待ち遠しかったからだ。いわば邪魔ものの月ではあるが、幸いにして、一つの貴重な実験の材料とすることができる。中学校で初めて『徒然草』をならったとき、うまいことをいったものだと感心した反面、いささか疑問にも思った記憶がある。ここの境遇を「配所」とするなら、その当否を確かめてみる絶好の機会だ。もっとも、答えは、前回の台湾時代からすでにはっきりしていた。いかにも何がしの中納言とかいう長袖者流の考えつきそうなことだ。それに共鳴した兼好もおかしい。罪ありてこその「配所の月」であろう。自由な無罪の身柄で、離れ島の観月旅行としゃれこみ、俊寛のおこぼれにあずかろうとは、虫のよすぎる話ではないか。芸能人なんかが「一日駅長」や「一日局長」に任命されたりする遊びと、わけが違う。「一日流人」などあり得ないのである。

恥ずかしながら、戦後三十余年を経た現在でも、どうかすると兵隊の夢をみることから、私はまだ完全には解放されていない。とはいっても、ソロモンにいたころの、いよいよこれが最期かと思った場面などは、不思議についぞみた覚えがない。爆弾や艦砲の恐怖も、案外深くは心に残らないものらしい。きまってあらわれるのは、どこかわからないが、帰るに帰れない場所に来て、何ともいえぬやるせなさにさいなまれているような夢である。京城では、丘の上の陣地にバラックの兵舎が建つまでの暫くの間、麓の方の学校に駐屯していたことがある。昭和十六年十二月八日の開戦当日はここで迎えた。学校の周辺は、当時でいう内地人の住宅地である。宵闇せまれば、この近くて遠い世界の家々には、暖かそうに灯がともり、ピアノの音が聞えてきたりする。「悩みは涯なし」は、歌謡曲の歌詞ではないのだ。多分、私の夢はこういったことが核になっているのだろう。忘れられない土地ではあるけれども、だからといって、いま仮に、当時の情況がそのまま再現され、夢の跡を訪ねることができるとしたら、おそらくは何の変哲もないものであるにちがいない。近松が言ったという、神経の通わぬ模像では、精巧であればあるほど、ほろぎたなくて興ざめするばかりである。そんな所へ私は行ってみる気がしない。西鶴は、さすがによくこの心理を見抜いてくれた。

「配所の月」に関するかぎり、『大系』の解釈は間違っていると思う。しかし、なお速断は禁物である。自分一個の小さな体験をもとに、配所と兵隊と世之介の身の上とを、直結して考えてきたからだ。もしそう簡単にはいかないとすれば、私の軍

配もまた差し違えを免れまい。悲しいことに、配所についても、世之介についても、具体的には何一つわかっていないのと同然なのである。「体験」そのものも、人によって異なるだろう。浅はかな主観的解釈だとする声が、どこからか聞えてきそうだ。

古い時代のことを肌で感じとるのはむつかしい。明治・大正や昭和初期でさえ、だんだんわかりにくくなってきている。文学の読み方などと、なまいきなことをいっているのではなく、もっと次元の低い話なのであるが、まんざら無関係でもないだろう。日用の器物一つにしても、自分で使った経験がないと、どうも実感をもってとらえにくい。文字でいくら詳細に説明されても、イメージの浮んでこないもどかしさはどうしようもない。挿絵や写真では五十歩百歩である。たまたま現物をみることができたところで、せめてそれを使用した人々の生活環境くらいは、おおよそあたまに描き出せるのでなければ、眼の前の物も、所詮ただの標本に終ってしまう。ある程度わかると思うのが、かえって錯覚かもしれないのだ。不勉強を棚に上げて、溜息をつくほかはない。

（一九七六・九・三〇）

## 小森さんを送る

里井陸郎

いつまでも黒髪のふさふさとした小森さんの若々しさはつねに羨望の的であった。多分にこれは体質的なものだが、西鶴に肉迫する小森さんの粘着力に示されたような近世文学との格闘の中から、又、目立たぬおしゃれの隅々に凝らされた粋人の風格の中にも見られる一事をも忽にしない生きざまのしつこさからくるものであるような気がしてならない。小森さんのエネルギーは時々私の中に抵抗感を喚んだが、それ以上に、強烈な刺戟と影響力をのこしたのである。入試問題の季節に、小森さんの文学力と人間性は眼も鮮やかに展開した。かけがえのない貴重な存在であった。

ことばが単に観念でなくて、生きた物として実感されなければならないとする立場から一貫して西鶴を手もとに引きよせようとした研究者文学者だったところに、生粋の町衆小森さんの本質があり、すべてはその枝葉なのである。小森さんを送ることは淋しいだけでなくて大きな損失である。